

The Learner

Doshisha International Academy, Elementary School

July
ISSUE



July 1, 2019

Volume 93

Message from the Vice Head of Schools

今年は、例年になく梅雨入りが遅く、G20 の大阪サミットの警戒が始まるのと時を同じにして、入梅の宣言がありました。今回のサミットでは世界経済の現状やリスク、そして、プラスチックごみや温暖化などが主な議題としてあがっています。特に海洋プラスチックごみの問題にどう取り組むか注目されました。グローバル化が進行する現在においては、ひとつの問題が、ひとつの国だけで解決できる問題ではなく、まさに地球規模で各国が協力して取り組んでいかねばなりません。

今から 154 年前のこの時期に、日本から脱国した 1 人の青年が、自分の国の未来を憂い、アメリカの文化やキリスト教を学ぼうと喜望峰をまわって大西洋上の船上でアメリカへの到着を心待ちにしていました。その青年こそが新島襄でした。インド洋を越え、大西洋を横断し、ボストンに到着するまでの希望や不安、家族愛など揺れる心情がその手記から伝わってきます。様々な苦難を乗り越え、ボストンについたその日が 7 月 20 日でした。

新島は、ボストン到着後、ワイルドローバー号のオーナーであったハーディー氏にその後のアメリカでの生活について全面的にバックアップしてもらい、フィリップスアカデミー、アーモスト大学、アンドーバー神学校での学校生活を送りました。この間、新島は将来の日本の目指すべき姿を模索し、固い決意のもと一生懸命学びました。

その新島が帰国し 1875 年に創立した学校が、同志社でした。そして、現在にまで受け継がれ、同志社の原点となる理念が「良心教育」です。現在同志社の各学校にはその象徴としての良心碑が建てられています。

2007 年私は、同志社主催の新島襄の足跡をたどるツアーに参加し、アーモスト、ラットランド、ボストンなどを巡りました。その際、新島が最初に学んだフィリップスアカデミーで、良心碑に出会いました。新島の生誕 150 年を記念して建てられた碑で、日本語で書かれた碑文とともに背面には英語でも碑文が書かれていました。同志社の理念は時を越え、海を越え、アメリカの地にも受け継がれているのを見て、熱い思いがこみ上げてきました。

私たちの同志社国際学院初等部は、バイリンガル教育と国際バカロレアの PYP 認定校としての探究型の学習を大きな柱としていますが、その根底にある「良心教育」になお一層取り組んでいかねばなりません。また、一人ひとりを大切にしたい学校生活を送るために、集団生活の中での「ルール」や「マナー」の尊重も欠かせません。足元の地道な取り組みを大切に一步ずつ進んでいければと思います。



*フィリップスアカデミーにある新島襄の写真と英文の解説

Frequent guest of this congregation and its Paster Dr. Ephraim Flint.
First baptised Christian of Japanese heritage in America. Speaker at the dedication of our present parsonage (1867) Founder of the Doshisha University in Kyoto, Japan. Founder of modern education in Japan.
Great Japanese Christian Saint and our friend.



キリスト教 教育テーマ

7月：平和 July：Peace

「平和を造る人々は、幸いである その人たちは神の子と呼ばれる。」

マタイによる福音書 5章9節（聖書協会共同訳）

先月下旬、広島のある女子校を会場に、全国規模の教員研修会がありました。その際、最初に会場校の校長先生が次のような趣旨のご挨拶をされ、私は少なからず衝撃を受けました。

「戦時中、本校の新入生徒たちは、礼拝を終えてチャペルから出て来た直後に被爆し、多くの命が失われました。その日は本来登校日ではなかったのに、翌日からの郊外での工場動員に備えて特別に登校していたのです。だから本校が教育の中で最も大切なこととして取り組むのは、平和教育以外にないのです。」

このお話を聞いた瞬間、私はとっさに無垢な美しい心そのまま旅立ち、次々と天国に移されていく少女たちの姿を思い浮かべました。

とは言うものの実際に彼女らの最後の声を聞き姿を目にした人々は、あまりの悲惨な状況に絶叫し、突然理不尽に若い命を奪われた彼女たちの為に、千度もの涙を流したことでしょう。どんな学校でも人々は建学の精神を大切に保ち、その歴史と伝統に誇りを持って歩んでいるものですが、その歩みの最中に前代未聞の大きな試練が襲った場合、一旦は進むのを止めざるを得ないことがあります。

しかしながら神を信頼し希望を持ち続けることで、学校は以前にもまして良い方向へと変わっていきます。その後着々と再建され、今では非常に美しい校舎やチャペルを持つこの学校には、広島の町の平和運動にリーダーシップを発揮している、素晴らしい生徒さんたちが大勢おられます。街角や平和公園の碑を巡り我々を案内してくれるその姿は、眩しいほどに立派で頼もしいものでした。

平和公園を歩いていて気付かされたことのもう一つは、記念碑の説明文が全て日英両言語で書かれていることです。もちろんこれは外国人観光客も読めるように、という配慮からでしょうが、私には「世界中の人に、どうしても伝えたいことがある。」という、広島の町の固い意志の表れにも思えました。



Christian Education Committee 石川眞弓

<お知らせ>

- ① 6月の「花の日」にはたくさんのお花が集まり、良い香りにも包まれてとても素敵な礼拝になりました。保護者さまのご協力に感謝申し上げます。捧げられた花は礼拝前後、聖書の会 SGさん達により大小33個の花束に分けられました。ステージ上では守衛さん、事務員さん、清掃員さんの代表の方々、放課後はバスの運転手さんと添乗員さん、通学駅の駅員さんたちに、児童ら自身の手で贈られました。また翌日はパン販売に来られている相楽デイセンターのスタッフの方々に贈られました。
- ② 5月・6月（「花の日」礼拝）のおにぎり献金の合計額は、23,277円+31,641円=54,918円でした。 貴い献金に、心より感謝申し上げます。



4年生宿泊学習 (Grade 4 Overnight School Event)

4年生は6月18日からの3泊4日、京都府の美山と宮津へ宿泊学習に行きました。Unit 2のテーマである「水の循環」について学ぶとともに、訪れた先々でたくさんの人と出会った宿泊になりました。

最初に訪れたのは日吉ダムです。ここでは、ダムの職員さんたちにダムの中を案内していただき、ダムの役割や歴史について学びました。

美山に到着すると、かやぶきの里を散策しました。資料館ではガイドさんから、昔の人々は一日の終わりに家族で囲炉裏を囲み、楽しいことも悲しいことも共有しあってきたというお話を聞きました。また、田んぼのあぜ道に腰をおろしてかやぶきの家々が立ち並ぶ様子を葉書にスケッチし、美山のゆったりとした時間を楽しみました。

2日目には、森林ガイドさんたちとともに芦生研究林へと出発しました。バスを降りると別世界です。大きな木が立ち並ぶ中、プロのトレッキングガイドさんとともに、3万2000ヘクタールもの広さの原生林の中を歩き始めました。森の中では、ブナ、トチノキ、カツラなどさまざまな木々に出会いました。木の肌に手を触れたり、においをかいだり、また、モリアオガエルやイモリなどたくさんの珍しい生き物にも出会いながら、川を20回以上わたって、由良川の水源地にたどり着きました。

美山では、3日目に間伐体験も行いました。慣れないノコギリを手に、グループで力を合わせて一本の木を切り倒しました。切った木はさらに玉切りにして、森の香りのするコースターを作りました。

最終日は、地引網の体験です。みんなで網を引き、とれたての魚をバーベキューでいただきました。

この宿泊で、子どもたちはたくさんのガイドの方々、先生方とかかわりながら、自然を相手に大きく成長しました。この経験をこれからの学びに活かしてくれることを願います。



かやぶきの里を散策しました。



たんぼのあぜ道でスケッチしました。



だんだん川幅が狭くなっていきます。



オトシブミの卵が見つかりました。



ノコギリでコースターを作っています。



力を合わせて網を引きました。



本を深く楽しむために

学校図書館は、学習・情報センターとしての役割と、読書センターとしての役割があります。子ども達のこれからの読書活動がより深く充実したものとなるための力＝読解力を付けるための授業をDIAではLC(リテチャーカ)の時間に取り組んでいます。中学年では一人一人の登場人物の行動や性格に基づき、場面の展開に即して変化する気持ちを中心にとらえていきますが、高学年では、登場人物の相互関係から人物像やその役割をとらえ、また内面にある深い心情も合わせてとらえていきます。そのため、その作品自体の叙述をしっかりと読み取ることが必要なことはもちろんですが、作家のバックグラウンド(背景となる基礎知識)を知ることによってその作品の良さをより深く理解することができます。例えば、5年生の国語の教科書に掲載されている『のどがかわいた』ウーリ・ホルグ作の作品について考えてみます。この作品は、作者のバックグラウンドが必要である顕著な作品であると考え、授業で5年生の子ども達に、作家について話を作品理解と合わせてしました。「のどがかわいた」は、寄宿舎学校での人間関係が、そぎ落とされた文章で表されている物語です。主人公のイタマルと、性格も対照的なミッキーは「のどのかわきを感じられる」という共通点からその関係が一気に深まっていきます。初読では(なぜ?そんなことで?)と感じてしまいそうですが、バックグラウンドを知った上でこの物語を読むと違ってきます。ウーリ・ホルグは、1996年に国際アンデルセン賞を受賞している作家で、1931年ポーランド・ワルシャワ生まれのユダヤ人です。ユダヤ人であったため、第2次世界大戦中はゲットーやポーランド人地区で隠れて暮らし、その後強制収容所に送られます。この「のどがかわいた」をはじめ4つの短編が収められている『羽がはえたら』には戦争を思わせる表現、文章は一切出てきません。しかしそのどれもが、8歳から14歳までの6年間の少年時代を大変な思いをしながら生きのびた作者だからこそ、五感が研ぎ澄まされ、ありふれた出来事がろ過されて日常にまぎれている純粋な幸せの結晶が物語となっています。高学年の読者には是非このバックグラウンドも含めて作品を理解してほしいと思います。もちろん同じ作者の他の本を読むこともお勧めです。



「のどがかわいた」の収められている『羽がはえたら』の表紙 小峰書店 もちろん図書館にあります!



「のどがかわいた」5年生教科書挿絵

DIA LibraryはDIAの子ども達の読書の学びもしっかりと支援していきたくと思っています。図書館の蔵書である図書資料についても、より様々な方向にアンテナを張り、利用者である子ども達はもちろん、その子ども達に授業をする先生方にも資料のサポートを行っています。図書館として必要な最新の情報がいつでも提供できるようにアンテナを張り巡らせて選書していきたいと思っています。

司書教諭 上里 久美

7月の主な行事・予定

1	Mon	Unit2(week5) G5 参観/学期報告会⑤⑥⑦
2	Tue	G6 個人懇談開始 (7/2~7/5) G3 ゲストティーチャー G1 参観,学期報告会,宿泊説明会①~④
3	Wed	G4 参観/学期報告会①② 委員会 G1 校外学習 (全日)
4	Thu	Swimming (G6/G2/G1)
5	Fri	
6	Sat	
7	Sun	
8	Mon	Buffer week
9	Tue	手洗い活動 G1,2 G3 参観/学期報告会②③④
10	Wed	クラブ 手洗い活動 G3,4
11	Thu	G2 参観/学期報告会④⑤⑥ 手洗い活動 G5,6
12	Fri	学期末カンファレンス
13	Sat	
14	Sun	
15	Mon	海の日
16	Tue	学期末カンファレンス
17	Wed	学期末カンファレンス
18	Thu	学期末カンファレンス
19	Fri	終業礼拝 学校安全点検日
20	Sat	
21	Sun	
22	Mon	
23	Tue	
24	Wed	
25	Thu	
26	Fri	
27	Sat	
28	Sun	
29	Mon	
30	Tue	
31	Wed	

8月9月の主な行事・予定

- 8/26(月) 始業礼拝(午前授業)
- 9/5(木) 入試前日準備(午前授業)
- 9/6(金) 入試のため自宅学習
- 9/11(水) G6第3回修学旅行説明会